

難波官跡第41.42次調査概報

昭和47年度

難波官跡第41.42次調査概報
昭和47年度

631
2
✓



難波宮跡第41・42次調査概報

第41次調査(図面1~3、図版1・2)

調査箇所 大阪市東区内久宝寺町1丁目 森工務店敷地内468㎡(約142坪)
調査期間 昭和47年5月11日~昭和47年5月22日
調査者 大阪市教育委員会 難波宮址顕彰会

5月はじめ、前期難波宮朝堂院南門の存在が予想される地域のすぐ南で、建物を建てる計画があることを知った。そこで施主の森工務店の協力を得て、短期間ながら発掘調査を実施した。

調査の結果、全体に平坦な面が続いており、あまり大きな擾乱はうけていなかったが、聖武朝瓦包含層や二、三の小柱穴を除くと特に顕著な遺構は認められなかった。恐らくこの地域は当初の推定通り、南門前の広場に相当するものと考えられる。

第42次調査(図面1・2・4・5、図版3~12)

調査箇所 大阪市東区法円坂町 旧人事院大阪地方事務所跡約964㎡(232坪)
調査期間 昭和47年7月1日~11月30日
調査者 大阪市教育委員会 難波宮址顕彰会

昭和27年以来20年にわたる研究と発掘調査によって、大阪城南の東区法円坂町を中心とする地域に、大別して前・後二時期の難波宮跡が存在することが明らかにされた。前期難波宮は大化改新の際の難波遷都に伴って造営が開始され、白雉3年(652)に完成した孝徳朝の難波長柄豊碕宮の遺構と考えられるもので、天武朝末年の朱鳥元年(686)に焼亡した。後期難波宮は、

奈良時代の初、神亀3年(726)から天平6年(734)にかけて造営された聖武朝の難波宮で、延暦3年(784)から始まる長岡宮造営に際して移建されたと考えられる。

前期難波宮の造営時期については、遺構全体を孝徳朝にまで遡らせる見解に対して、その規模や殿舎配置を当時の国制の反映とみると、孝徳朝段階で前期難波宮の遺構にみられるような大規模で整備された宮殿が造営されたとは考え難いとの立場から、後の「十二堂院」に相当する部分は、国制の整備された天武朝段階でつけ加えられたのではないかと^{註1}疑問が呈されている。今回の第42次調査はそうした問題を解決していくための一つの手がかりとして、前期難波宮の「大極殿院」と「十二堂院」を区画する回廊がどのような接続状況を示すかを明らかにすることを一つの目標とした。また、後期難波宮についてはこれまでの調査や他宮跡との比較から存在の予想される西棧址と内裏・朝堂外郭築地址を検出することを意図した。

第42次調査の実施にあたっては難波宮址顕彰会専門委員の諸先生、特に浅野清・福山敬男博士のほか、奈良国立文化財研究所沢村仁博士の懇切なる御指導をうけた。ここに記して厚く謝意を表したい。

◀前期難波宮の遺構▶

掘立柱礎庫址(S04202・4203) 第35次調査で検出された東西方向の掘立柱礎庫址の西延長部を追跡した結果、第35次調査で検出された掘立柱南北回廊西側柱より11間(32.10m)西の地点で南に曲折することを確認した。東西・南北回廊とも柱間寸法は桁行2.92m、梁行2.34mで、柱抜取り穴には天武天皇朱鳥元年(686年)焼亡の際の焼土・焼壁が充填していた。また、この回廊の外側には第35次調査の場合と同様、後に付加した軒支柱のものではないかと思われる小柱穴の存在が認められた。第35・36

次調査と今回の調査の結果からみて、この掘立柱礎庫は、約32m四方の区域を正方形に区画していたと考えられる。第35次調査で検出された東面回廊とはちがい、北・西面回廊の桁行柱間寸法に異同がなく、全て2.92m等間になっていることから考えると、日赤法円坂分院構内で検出されている「十二堂院」回廊は北に延びて、この方形区画の西南隅に取付くような形になるのではなからうか。

掘立柱八角形建物址(SB4201) 上記礎庫で区画された内部中央から発見された平面八角形の遺構で、その柱穴の配置状況や柱間寸法は図面4・5の通りである。柱穴のいずれにも焼土・焼壁の痕跡が認められた。その柱掘形は回廊址や従来検出されている前期遺構のそれに比してやや小さいが、内側柱穴には掘形いっぱいには直径67cmに達する柱痕跡が検出されているものがある(図版11)。前期遺構の旧地表は後期難波宮の造営や後世の土木工事に際して削平・擾乱をうけていて不明であるが、八角形建物の柱穴の深さは、現遺構面より外・中側柱穴が約25~50cmであるのに対し内側柱穴は約106cmとなっていて、その柱径の大きいことと共に注目される。八角形建物の具体的な構造については今後の調査資料の整理と研究に待たねばならず、現在の段階ではその平面が八角形になることを確認したに止まっている。

平面八角形の建物としては、a) 八角層塔 b) 八角円堂 c) 八角婆蘭などが考えられるがわが国における代表的な遺例は別表の通りである。

これらの遺例と比較した場合、今回発見の八角形建物址は

- 1) 7世紀中葉のもっとされる京都市右京区嵯原内垣外町にある嵯原廃寺八角塔址と並ぶ最古の遺例になる。
- 2) 具体的な上部構造などについては現在不明であるが、その平面規模は、わが国最大といわれる奈良興福寺南円堂のそれをしのぐものがある。
- 3) 従来の八角塔・円堂が全て仏教寺院にかゝるものであるのに対し、宮

殿址からの最初の発見である。

註 2

- 4) 複廊で区画されていることや、前期難波宮の殿舎配置中に占めるその位置からみて重要な殿舎であったと考えられる。

	遺 例	年 代	建 物 幅	基 壇 幅
日本	前期難波宮八角形建物	652(白雉3年)	約17.7m	
"	櫻木原陵寺八角塔基壇	7世紀 中葉	?	12.27m
"	南法華寺(壺坂寺)八角円堂基壇	708(大宝3年)?	?	約12.5m
"	興福寺北円堂	721(養老5年)	11.7m (40天平尺)	
"	法隆寺東院夢殿	739(天平11年)	11.264m (38天平尺)	
日本	法隆寺西円堂	8世紀中葉(天平末年)?	11.083m	
"	栄山寺八角円堂	764(天平宝字8年)頃	7.95m (27天平尺)	
"	西大寺八角塔基壇	8世紀後葉(神龜殿中葉)?	?	26.7m (90天平尺)
"	平城宮東張出部東南隅庭園八角形構	" "		
"	興福寺南円堂	818(弘仁4年)	15.45m	
北朝鮮	平壤清岩里慶寺八角基壇	497(高句麗文咨王7年)	?	26.5m

その性格や機能について述べることは、現在の考古学的調査の段階では困難であるので今後の研究にまきたい。今回は下記のような推測の二、三を挙げるに止めたいが、恐らくこれらの機能を兼ね備えたものであろう。

- 1) 前期難波宮の殿舎配置と藤原宮以降の諸宮跡のそれとの比較から、後の「東樓・西樓」に相当する楼閣的な建物。
- 2) 今回の例を除くと、その全てが仏教建築であることを考えると、「仏殿」的な建物ではなかったかとも考えられる。もしそうであるとなると、そ

うした建物が前期難波宮の中の重要な一面を占めていることの意味が改めて問題となろう。

- 3) 日本書記舒明天皇8年7月条、大化3年は歳条などにみえるような、朝廷への参入・退出の時を人々に知らせるための「鐘台」的な施設。

いずれにせよ、詳しくは今後の難波宮跡の研究と調査に待たねばならないが、今回白雉3年(652)に完成した孝徳朝の長柄臺磯宮であると推定できる前期難波宮に、掘立柱複廊で囲まれた八角形建物址が発見されたことは、建築史学の上においても、また大化改新の評価をめぐる論争のおこなわれている古代史学にとっても、きわめて興味ある発見であり、今後の発掘調査の成果が期待される。

《後期難波宮の遺構》

内裏・朝堂院外郭築地址(844241) 第14次調査東地区で検出された内裏西外郭築地片垣廊の南延長部分に当り、約7m幅の築地土壇痕跡とその両側の瓦堆積を検出した。この築地土壇痕跡の西縁に柱間約3.8~3.4mの花崗岩礎石2個と5ヶ所の礎石抜き取り跡を検出した。花崗岩礎石は凝灰岩片や聖武朝瓦片を根石としてすえられているが、それに対応する東側柱列が発見されない点など第14次調査東地区で検出された内裏西外郭築地とは状況を異にしている。今回の調査の結果、内裏西外郭築地が単に内裏外郭のみならず大極殿院西外郭まで延びていて、第15・22・25次調査で検出されている十二堂院西外郭築地とも何らかの形で接続する可能性が考えられる。

西樓址 平城宮(第2次)東樓址に準じて難波宮西樓址を復原すると、今回の第42次調査地城東南隅でその一部が検出される予定であったが、調査の結果ではその存在は確認できなかった。前期八角形建物の存在を確認するため

に実施した坪掘り部分で、第85次調査で検出された後期大極殿院回廊雨落溝の西延長部(SD4240)が発見されていることを考えると、後期西楼址はこの溝より南側、大極殿の西方に存在していたのではないと思われる。将来の調査に待ちたい。

《難波宮下層遺跡》

前期回廊址・八角形建物址と重複して、難波宮造営前の下層遺跡の柱穴多数が検出されている。発掘地域の西半部が難波宮造営の際に整地盛土されているために柱穴を検出できないこともあって、一つの建物としてまとめられるものは少ない。SB4280は柱通りが北東-南西方向を示す8間以上(5.7m以上)×8間(5.1m)、SB4281は柱通りが北北東-南南西方向を示す6間以上(15m以上)×8間(5.1m)のいずれも獨立柱建物址である。SA4282は柱間約2m、5間以上の獨立柱列である。こうした難波宮の下層から検出され、難波宮の遺構とはその方位を異にする獨立柱建物址はこれまでの発掘調査によって多数発見されているが、伴出する土器の年代から、ほぼ6世紀末から7世紀前半にかけて築かれたものと推測できる。難波宮の下層から部分的に検出されているに過ぎないので、その全貌は未だ明らかにし得ないが、今後の調査の進展によって、大化前代の難波復原の上で貴重な資料を提供するものとなろう。

(中尾芳治)

註1 中尾芳治 「前期難波宮をめぐる諸問題」(考古学雑誌 第58巻第1号 1972年7月)

註2 平城宮東張出部東南隅庭園址から検出された遺構は、柱間寸法8尺等間の方2間の身舎で、北と西に廂があり、遺存した獨立柱が八角形に面取りしてあったことから、八角形の隅柱に復原されている。しかし

その柱の平面配置や占める位置がこれまでの八角層塔・円堂の遺例や難波宮八角形建物とは異なっていて同列には論じ難い。

「第44次調査概要」(奈良国立文化財研究所年報 1968 89頁
1968年12月)

「埋れていた奈良の都-平城宮展目録」(朝日新聞社 1969年1月)

註3 中尾芳治 「難波宮造営前の遺跡調査報告」

(『難波宮址の研究 第五の二』所収 1965年1月)

難波宮址顕彰会 「昭和43年度(第80次)難波宮跡調査報告書」
1969年4月

1. 調査地域全景

(東から)



2. 調査地域西端部の近世柱穴

第 42 次 調 査



3. 調査地域遠景

(北から)



4. 調査地域および整備地域

(西から)



5. 調査地域全景

(東から)



6. 同 上

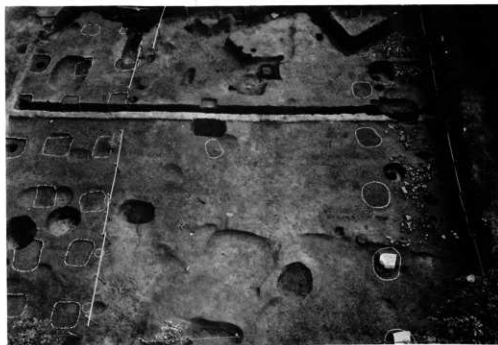
(西から)



7. 前期回廊址 (SC 4202・4203) と 前期八角形建物址 (SB 4201) (南から)



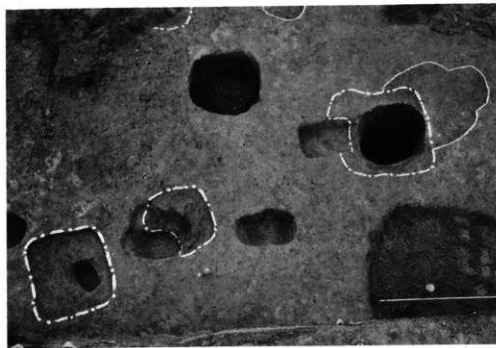
8. 前期八角形建物址 (SB 4201) (西北から)



9. 前期回廊址
(SC 4203) と
後期内裏・朝堂
院外郭築地
(SA 4240)



10. 後期築地址の
瓦出土状況
(南から)

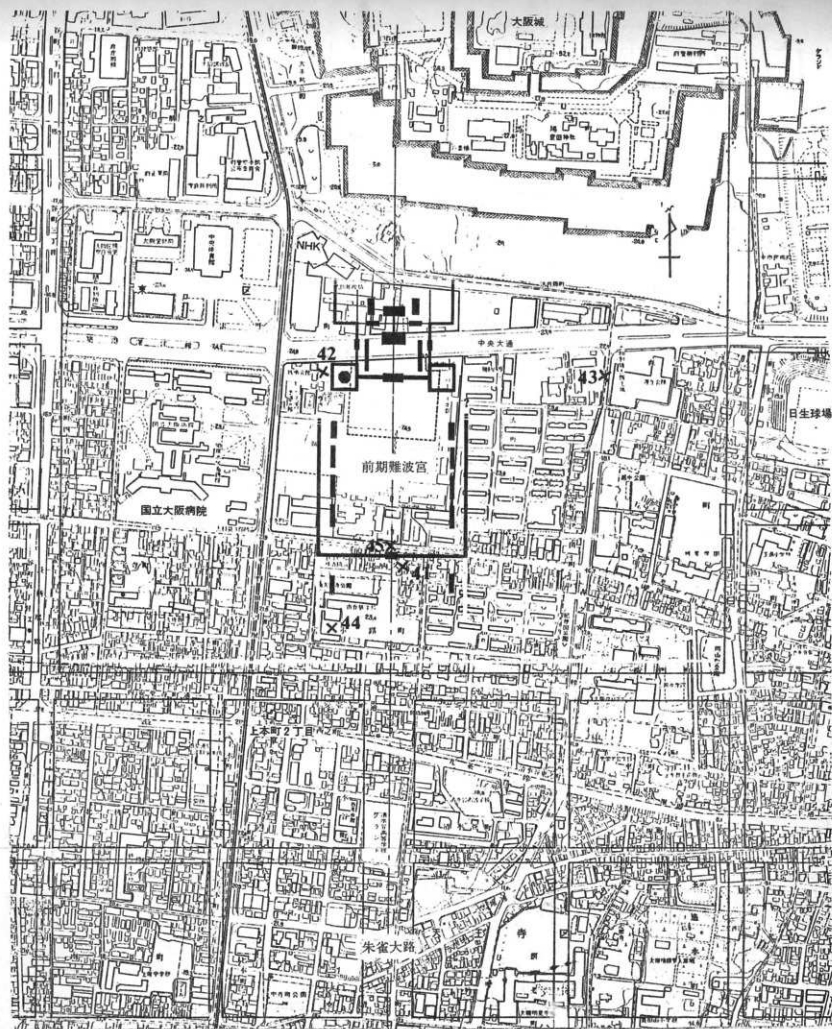


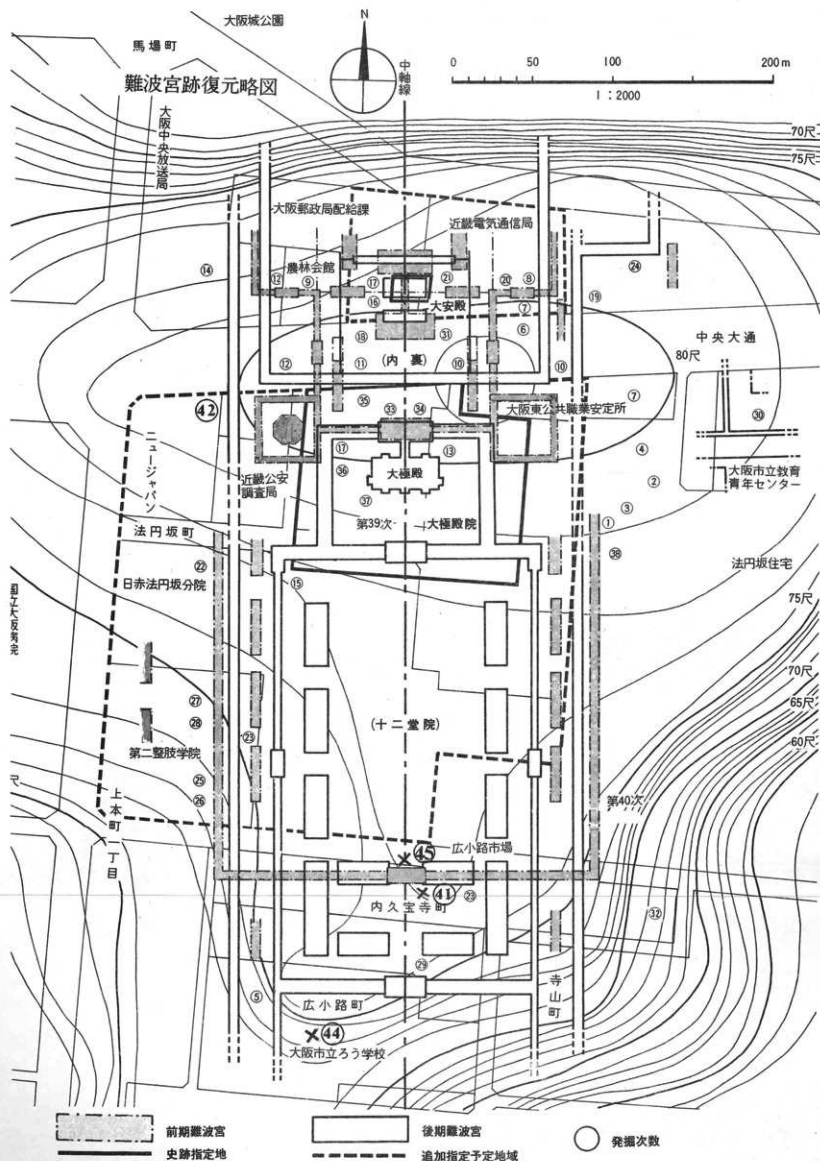
11. 前期八角形
建物 (S B 4201)
の柱穴
(南から)

12. 前期八角形
建物の柱穴と
後期大極殿院
回廊溝址
(南から)



難波宮跡地形図 (平村 仁氏復原による)





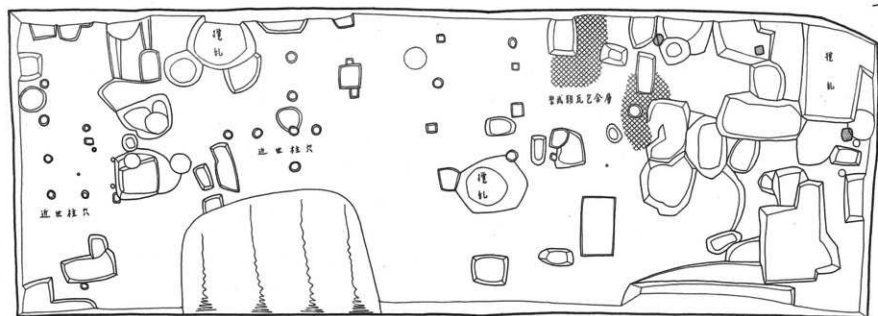


圖3. 第41次調查成果略圖

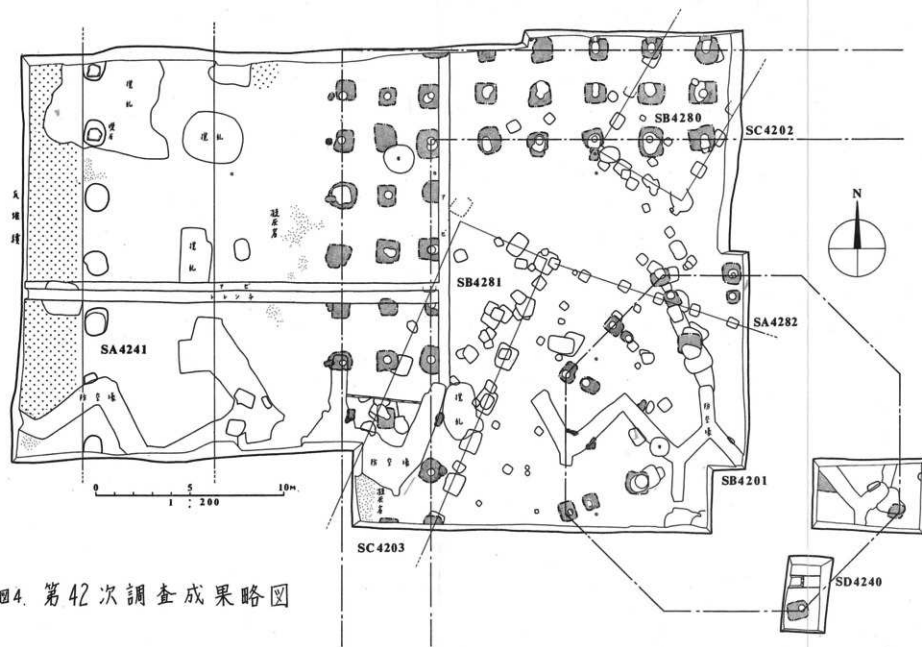


図4. 第42次調査成果略図

